

早瀬真人

挿絵：由衣 .H

爛熟艶母と美姉妹

魅惑の温泉旅行

試し読み版

リアルドリーム文庫





# 魅惑の温泉旅行

爛熟艶母と美姉妹

早瀬真人

挿絵 / 由衣 .H

## 目次

プロローグ	4
第一章 義母の豊満な肉体	8
第二章 美熟女の口唇奉仕	35
第三章 義姉との一夜のあやまち	91
第四章 処女のいたいけなつぼみ	141
第五章 爛熟美女の淫らな姿態	184
第六章 果てしない狂乱の宴	230
エピローグ	277



## 登場人物

Characters

### 古田 勇介

(ふるた ゆうすけ)

この春、二年に進級したばかりのどこにでもいる童貞高校生。父は地主で尚且つ、不動産経営をしており大きな屋敷に住んでいる。

### 古田 絵里子

(ふるた えりこ)

勇介の自宅のとなりに住んでいた未亡人で、色気ムンムンの豊満熟女。勇介の父には五年越しに交際を申しこまれており、再婚を決意した。

### 古田 美貴

(ふるた みき)

勇介の幼馴染で気が強く、負けず嫌いな性格の美少女学生。家族の絆を大事にしており、絵里子や萌には何でも相談するほど仲がいい。

### 古田 萌

(ふるた もえ)

美貴の妹で高校に進学したばかりの可憐な少女。ツインテールが愛らしく、天真爛漫で明るい性格。幼い頃から、勇介を本当の兄のように慕っていた。



## 第二章 美熟女の口唇奉仕

(う、嘘だろ)

勇介は愕然としたまま、湯船の中で身を強ばらせた。

絵里子にはひと言断ったのだから、入浴している事実を知らないわけがない。酔いが回り、正常な思考が働かないのか。

美熟女はバスタオルで身体の前面を隠していたが、端から乳房と腰回りの輪郭がはつきり見える。

官能的なカーブを描くボディラインに、心臓が早鐘を打ちはじめた。

「どう、湯加減は？」

「あ、あ、さ、最高です……つて、絵里子さん、僕が入ってるんですよ」

「あら？ 別にいいじゃない」

「美貴や萌ちゃんは、どうしたんですか？」

「本館の大浴場に行ったわ」

「だ、大丈夫なんですか？ お酒、飲んでるのに」

「缶ビール一本だもの。平気よ」

絵里子はそう答えるも、顔はすでに首筋まで桃色だ。

彼女はためらうことなく、キャビンにバスタオルを放り投げる。そしてすり足で歩み寄るや、勇介の眼前で腰を落とした。

美熟女が木桶でかけ湯をするあいだ、羞恥から顔を上げられない。

(清楚で淑やかな絵里子さんが、こんな大胆なことするなんて……)

やはり、運転の疲れが影響しているのだろう。アルコールが回っているとしか考えられなかった。

「お邪魔するわね」

上目遣いにかがえれば、絵里子は半身の体勢から湯船に浸かっていく。

豊かな腰がふるんと弾み、湯に濡れた肌がなまめかしい光沢を放った。

遠目からの覗き見ではない。今度は熟れた肉体が目と鼻の先にあるのだが、もちろんまじまじと凝視する度胸はなかった。

(いったい……どういいうつもりなんだよお)

ひたすら当惑する最中、絵里子は勇介と相対するかたちで肩まで浸かる。

「ああ……いい気持ち。やっぱり、温泉って最高だわ」

熟女はホッとひと息つき、双眸を閉じる。



ここぞとばかり、童貞少年は見目麗しい容貌を注視した。

長い睫、抜けるように白い肌、情熱的な赤い唇。湯船の中で揺らめく乳房の膨らみがたまらない。

源泉は濁り湯ではなく、透きとおっているため、身体の稜線を隠すことなく見せている。それでも、この状況では困惑のほうが強く、性欲は少しも頭をもたげなかった。

「こんなにのんびりするの、久しぶりだわ」

絵里子が目を開けると同時に、慌てて視線を逸らす。突発的な状況を受けいれられず、勇介は照れ隠しに自ら話を振った。

「まさか、あの親父がこんないい旅館を予約するとは思っていませんでした」

「みんなを喜ばせたかったみたいよ。でも、ここは一泊だけらしいわ」

「そうなんですか……。明日と明後日は、どこに泊まるんですか？」

「ふふっ、それは子供たちには内緒にしてくれって言ってたわ。着いてからの、お楽しみですって。あの子たちにも、知らせてないのよ」

ずぼらで脳天気な父が計画した旅行だけに、どうにも不安は打ち消せない。

気難しい顔をした瞬間、絵里子は眉を顰めた。

「あら、やだ。こつち向きだと、景色が全然見えないわ。勇介くんとなりに行ってもいい?」

「え、あ、はい……かまわないですよ」

身体をずらし、右サイドに空間を作ると、熟女は湯船に浸かったままの体勢でゆっくり近づいた。

爛熟のボディを反転させ、肩と肩が微かに触れあう。

「うん……やっぱり、いい眺めだわ」

憧れの熟女と、混浴している状況がいまだに信じられない。気まぎれに俯くや、絵里子は申し訳なさそうに謝罪した。

「……ごめんなさいね」

「え? な、何がですか?」

「突然、赤の他人が家の中に入ってきたんだから、戸惑うのは当然のことだわ。あなたも了承したって聞いたから」

「いえいえ、絵里子さんは悪くないです」

「びっくりしたわ。何も聞いてないって言われたときには」

「親父が全部悪いんですっ!」

父に対する不信感を思いだし、ことさら語気を強めると、絵里子は寂しげに目を伏せた。

「勇介くんのこと、ずっと気がかりだったの。私たち、もとの家に戻ったほうがいいのかしら」

「えっ!!」

思わぬ提案に、勇介は裏返った声をあげた。

確かに、父との再婚を知ったときは激しいショックを受けた。幼馴染みである美貴や萌との同居も、素直に受け入れられない。

だが、今さら絵里子のいない生活は考えられなかった。

「ず、ずっといてくださいっ!」

無意識のうちに本音を告げたとたん、勇介はもはや自分が大人になるしかないのだと悟った。

憧れの未亡人はすでに父の妻であり、美貴や萌とも親族になったのだ。いつまで拗ねていても、仕方ないではないか。

「なんか、逆に気をつかわせちゃって、すみません」

「本当に……いいの？ このままで」

「え、ええ。いっしょに住んでからまだ二週間ですし、少しずつ家族になっていけたらなと思います」

精いっぱいの見栄を張り、しばし沈黙の時間が流れる。やがて絵里子は、真つすぐな視線を向けてきた。

「でも……いろいろと問題がありそうだし」

「は？」

「勇介くん……どうして下着なんか盗んだの？」

今度は、天地がひっくり返るような衝撃だった。

(な、何で?)

美貴が、昨夜の一件を絵里子に話したと考えるのが妥当だろう。

(あいつ……言わないって、約束したのに)

怒りが込みあげると同時に、身を焦がすほどの羞恥が襲いかかった。

「美貴が萌を先に浴場に行かせたから、何か話があると思ったの」

「い、今さつき、聞かされたんですか？」

「ええ、あなたに注意しろって言い出すから、その理由を聞いたの。最初は言いづらそうだったけど」

「ど、どこまで聞いたんですか？」

絵里子の私物を盗むつもりが、実際は美貴の下着だった。しかもパンティの匂いを嗅いだばかりか、頭に被り、射精シーンを萌に見せつけてしまったのである。

すべてを聞かされたとしたら、恥ずかしくて生きていけない。勇介は渓谷に飛びこみ、自ら命を絶つ衝動にさえ駆られた。

「どこまでって……私の下着を盗んで部屋に戻ろうとしたあなたを、美貴が見咎めたんでしょ？ 奪い返して、洗濯機の中に戻したって言うってたわ」

年頃の女の子だけに、やはり真相は話せなかったのだろう。ひとまず安堵の吐息を洩らすも、崖っぷちの状況は変わらない。

（どう答えたらいいんだ？ このままじゃ、変態だと思われちゃう）

勇介はいったん間を置き、心の奥底に秘めていた恋心を吐露する決意を固めた。

「あ、あの……好きだったんです」

「え？」

「こ、子供の頃から、その、絵里子さんのことを」

頭に血が昇り、心臓が縮みあがる。

絵里子が呆気に取られるなか、勇介は真摯な態度で釈明した。

「だから、父との再婚がショックだったんです。絵里子さんがそばにいてくれて、うれいと思う気持ちと、あきらめられない本心のごっちゃになっちゃって……」

「……まあ」

「下着を盗もうとしたのは、その、なんと言っていていいやら……そんな行為でしか、絵里子さんに近づけないと思って……ご、ごめんなさい！」

頭を垂れた瞬間、額から汗がたらたらとこぼれた。本来なら安らぎを与える露天風呂が、一瞬にして主戦場と化した気分だった。

いやらしい男の子だと思われたか。はたまた、同居はできないと判断するのか。今は誠心誠意、謝罪を繰り返すしかない。

「もう二度としませんっ！ だから、今回だけは見逃してくださいっ」  
水面が揺らめき、絵里子が前方に回りこむ。

（や、やばい……殴られるかも）

奥歯を噛みしめた直後、意外にも熟女は抱きついてきた。

ふんわりした乳房が胸に合わされ、柔らかい肉肌の感触に驚嘆する。

「あ……え、絵里子さん」

「うれしいわ」

「え？」

おさな子を抱くように抱擁され、落ち着きを取り戻す一方で性感がゆったりした上昇カーブを描いた。

「お、怒ってないんですか？」

「そりゃ、怒ってるわよ。でも、今はうれしいという気持ちのほうが強いのに」  
年上の美熟女に憧れたのは、何でも許してくれそうな包容力があるからだ。

酸いも甘いも噛み分けた大人の女性は、やはり十代の美貴とは違う。

自分の目に狂いはなかったと実感した勇介は、ようやく緊張から解き放たれた。

「でも……あと数年もすれば、若い女の子が好きになるわよ。勇介くんは、亡くなっ  
たお母さんを私に重ね合わせているだけだわ」

「そ、そんなことないですっ！ 僕は、絵里子さんひと筋ですっ!!」

自信たつぷりに宣言すれば、絵里子は身体を離し、勇介の顔をじっと見つめる。

涼しげな笑顔、潤んだ瞳。蠱惑的な表情を目にした瞬間、全身の血液が股間の中心に集まりだした。

（あつ、やばい、鎮まれ、鎮まれえっ！）

ペニスは鎌首をもたげ、ぐんぐんと体積を増していく。

幸いにも、絵里子はまだこちらの生理現象に気づいていない。両手でさりげなく秘部を隠すと、熟女は再び抱きついてきた。

「告白してくれたから言っちゃうけど、勇介くんみたいな男の子がほしかったの」

「へ？」

「二人とも娘でしょ？ だから、あなたが子供の頃から本当の息子のようない気持ちで接してきたのよ」

当然のこととはいえ、二十歳も年下の男は恋愛の対象にならないようだ。

（しようがないか……親父の奥さんになつたんだし、もうどうすることもできないんだから）

失意にまみれるも、思いの丈を吐きだしたことですつきりした気持ちもある。それでも牡の証は別人格とばかり、ますます猛々しい昂りを誇っていった。

「うふ……かわいい」

下着窃盗の事実を知られても、どうやら嫌われてはいないらしい。

ホッとしたところで、絵里子は甘く睨みつけた。

「いけないことしたらだめよ」

「は、はい」



「約束できる？ 二度としないって」

「しますっ！ もうしませんっ!!」

穏やかな叱責が、胸をキュンと疼かせる。

（俺……やっぱり、絵里子さんが好きだった！）

恋の炎を燃えあがらせたとたん、美熟女は顔を近づけ、ふっくらしたリップを勇介の唇に重ね合わせた。

（えっ!!）

あまりの驚きに目を剥き、息を呑む。生まれて初めてのキスに呆然とするあいだ、絵里子は顔を左右に揺らし、少年の唇をやんわり貪った。

（お、俺……キ、キスしてる？ 信じられないよっ）

単に酒に酔っているだけなのか、それとも恋心を打ち明けたことへの感謝の意なのか。いずれにしても、柔らかい唇の感触に、ちっぽけな疑念は忘我の淵へと沈んでいった。

絵里子はさらに、豊満な胸をぐいぐい押しつける。バランスを失い、後ろ手をつけば、美熟女は唇をほどきざま、吐息混じりの声で囁いた。

「口を開けて」

「あ、ああ」

甘い誘いの言葉に抗えず、言われるがまま口を開く。

絵里子はすかさず顔を横に傾け、再び濡れた唇を被せてきた。

熱い舌が差しこまれ、じゅっじゅつと唾液が吸われる。さらには菌茎や口蓋を舐めまわされ、舌をあつという間に搦め捕られた。

（お、おつ、デイ、ディー。キスだああああ！）

化粧とルージュの上品な香り、そして湿り気のある濃厚な吐息が口いっぱい広がります。この時点でペニスはフル勃起を示し、下腹にべったり張りついています。

今、憧れの熟女と、まごうことなき粘膜を交換し合っているのだ。

下腹部には性欲の嵐が吹きすさび、下手をしたら、すぐにでも射精への導火線に火がともりそうだった。

絵里子は大口を開き、舌を生き物のようにくねらせる。予想外の情熱的なキスには、ただ目をぱちくりさせざるばかりだ。

「んっ、ふっ、んっ、ふう」

鼻から洩れる甘ったるい声、くちゅんと唾液の跳ねる音が聴覚を刺激した。

熱い吐息が口中に吹きこまれ、射精欲求が瞬く間に頂点まで追いつめられた。

キスの合間に胸や腕を手のひらで撫であげられ、快感電流が全身を駆け抜ける。腰を引き攀らせた直後、下腹に移動した指先が恥毛を優しく掻きあげた。

（あ、ま、まさか……）

彼女の指から男性器まで、わずか数センチ。凄まじい期待感に衝き動かされ、来たるべき瞬間に会陰を引き締める。

やがて指腹が肉幹に巻きつくと、今まで味わったことのない快美が股間から脳天を突き抜けた。

「んっ！ んふうううっ！！」

あまりの衝撃に息を吐きだせば、絵里子がようやく口を離す。

二人の唇のあいだに透明な粘液が橋を架け、ぷつりと途切れて湯船に滴った。

「すごいわ……勇介くん、いつの間にか大人になったのね」

「あ、あ、あ」

言葉にならず、やや上方に視線を向けて口をぽかんと開け放つ。

勇介は身を硬直させたまま、全身を小刻みに痙攣させた。

今は、指一本も動かさせない。脱力したと勝手に射精してしまうのは、火を見るより明らかなのだ。

「……コチコチだわ」

「く、くおっ」

絵里子は耳元に口を寄せ、さらに甘い声音で囁いた。

「私もね、あなたのお父さんにすごく怒ったの」

「え？」

「だって、そうでしょ？ 自分の子供に相談なしで、再婚するなんてありえないもの。勇介くんが、あまりにもかわいそうだわ」

「は、はあ」

「あなたに母親として認めてもらえるよう、私も精いっぱい努力するつもりよ」

美熟女が淫らな行為を仕掛けてきたのは、罪滅ぼしのつもりなのか。さらにはアルコールの作用が、彼女の情動に拍車をかけているのかもしれない。

股間に炸裂した快美に翻弄され、今は思考がまったく働かない。眉をハの字に下げ、ぜいぜいと喘ぎ声を洩らすばかりだった。

手のひらが裏茎を撫でさすり、指腹が雁首をなぞりあげる。指先が敏感な尿道口をつつき、今度は陰囊を優しく揉み転がされる。

「は、はあああああっ」

身をくねらせて咆哮すると、絵里子は艶然とした微笑をたたえ、湯船の中で肉茎を軽くしごいた。

「あ、あ、あ……え、絵里子さん、僕、もう」

「もう、何なの？」

悪戯っぽい小悪魔的な表情は、初めて目にする女の顔だ。背筋をゾクゾクさせた瞬間、白濁の塊が射出口を突きあげ、頭が左右にふらついた。

長湯と著しい昂奮のせいで、意識が朦朧とする。頬を伝った汗が顎から滴り落ちる頃、絵里子はペニスを解放し、身体を離れた。

「ごめんなさい、このままじゃ、のぼせちゃうわね。ここに座って」

「あ、は、はい」

浴槽の縁に促され、湯船から立ちあがって石切の上に腰を下ろす。前方に広がる壮観な眺めはぼんやり霞み、もはや視界に入らない。

熟女もすぐさまあとに続き、勇介のとなりに腰掛けた。

湯に濡れたグラマラスボディに、目が奪われる。

今にもこぼれ落ちそうな双乳、蕩けんばかりの柔肉をまとわせた腰回り。遅しいとさえ思える太腿と、こんもりした恥丘の膨らみが猛烈な性衝動を誘発させた。

心地のいいそよ風が肌を撫で、薄れかけていた意識がはつきりしだす。

ひと息ついたところで、絵里子はまたもやペニスに指を絡めた。

「あつ、おつ、おつ」

「ね、もう、何なの？ まだ答えを聞いてないわよ」

「はっ、はっ、それは……」

タイルに後ろ手をつき、臀部を小さくバウンドさせる。

ボーダーラインまで引き下げられた性感は瞬時にして息を吹き返し、うなぎのぼりに上昇していった。

「あら、先っぽから変な汁が垂れてきたわよ」

「はっ、はあああああつ」

視線を下腹部に落とせば、パンパンに張りつめた亀頭は先走りの液でヌルヌルの状態だ。

「いやらしい糸を引いて……これ、何かしら？」

意地悪な質問を投げかけられるたびに脳漿が煮え滾り、全身の血が逆流した。

小休止は何の役にも立たず、顔が真っ赤に染まる。

（し、信じられないよ。こ、この人、本当に絵里子さん？）

清廉な淑女は妖艶な熟女へと変貌し、多大な性的昂奮を与えた。

子供の頃から憧れていた女性だけに、シヨックを凌駕する高揚に勇介はすっかり身を委ねていた。

我慢汁が源泉のごとく噴きこぼれ、しなやかな指の隙間にすべりこむ。

につちゃにつちゃと淫靡な音が耳に入り、射精欲はついに臨界点まで膨張した。

「あ、で、出ちゃう、出ちゃう」

「まあ……何が出るのかしら？」

「せ、せ、せ、精子ですっ」

「このまま、出しちゃっていいの？」

「へ？」

「私の身体、触りたいんじゃない？」

ハツとして視線を横に振れば、釣り鐘状の乳房がゆっさゆっさと弾んでいる。

勇介は本能の赴くまま、目の前の豊乳にかぶりついた。

「あ、ああっ」

左の乳房を口に含み、右の乳房を左手で揉みしだく。

張りつめた乳丘は瞬時にして楕円に形を変え、指先は力を込めずとも肉肌の中にめ

り込んだ。

（おっぱい、おっぱい、絵里子さんのおっぱいだっ！ や、柔らかいっ！ しつとり、ふんわりしててっ!!）

スフレを思わせる肌触りに陶然とし、無我夢中で乳首を舐めしやぶる。

美熟女も昂奮状態にあるのか、乳頭はすでに硬いしこりを見せていた。

舌を跳ね躍らせ、小粒な葡萄をあやしてはいらう。傍目から見れば、片手で勇介を掻き抱く絵里子の姿は赤子をあやす母親のようだった。

「んっ、んっ、んっ」

「あ、んっ」

チューチューと吸いたてれば、頭上から艶っぽい声が聞こえてくる。

両太腿を割り開いて女の園を観察し、匂いや感触を確かめたかったが、もちろんそこまでの余裕はない。やがて彼女の指が本格的なピストンを繰りだし、頭の中がピントクの霧に塗りつぶされた。

前触れ液が潤滑油の役目を果たし、肉胴の表面になめらかな感触を生みだす。

ふっくらした指腹が往復するたびに、牡のエキスがカートリッジに装填される。

「む、むふううっ！」



快感電流が何度も身を駆け抜け、乳房の愛撫に集中できない。巨大なバストから顔を離れた直後、絵里子の右腕が残像を起こすほどのスライドを見せた。

「あ、あ、あ……イッチャウ、イッチャウ」

「いいわよ、たっぷり出して。勇介くんがエッチなミルク出すとこ、全部見てあげるわ」

「あ、くおおおおおつ」

かぐわしい吐息とともに放たれた淫語が脳幹を貫き、自製の壁を一気に打ち崩す。性欲の塊が股間の中心で爆発した瞬間、勇介は射精を訴える声を喉の奥から絞りだした。

「もうだめっ！ イクっ、イクっ、イキますっ！」

亀頭の先端から、濃厚な一番搾りがびゅるんと噴きあがる。

一発目は勇介の頭付近まで跳ね飛び、続けざまに二発、三発、四発と、おびただしい量の樹液を放出していった。

「きやつ、すごいわ」

灼熱の淫液が自身の顎、首筋、胸をムチのように打ちつける。絵里子は硬直を崩さない肉幹を何度もしごきあげ、尿管から残り汁を搾り取っていった。

合計、七回は射出しただろうか。噴出が収まっても、荒い息が間断なく放たれる。

「まだ出るんじゃない？」

視線を虚空にさまよわせるなか、熟女は人差し指と親指でペニスを根元から雁首まで絞りあげた。

「はうっ」

「やっ、出たっ」

残滓がびゅつと跳ねあがり、絵里子が歓喜の声をあげる。

勇介はブーツとした顔つきで、自身の股間をいつまでも見下ろしていた。

大量射精のためか、頭の芯が霞がかり、湯あたりしたケースと同じ状況だ。

童貞少年は快楽の余韻に浸りつつ、徐々に意識を遠くに飛ばしていった。

4

「勇介くん……大丈夫？」

どれくらい、気を失っていたのか。ひんやりしたタオルの感触に、勇介は正気を取り戻した。

いつの間にかキャビンに寝かされ、絵里子がとなりのチェアから冷たいタオルを首筋に押しつけてくる。

（そ、そうだ、絵里子さんの肩を借りて、ここまで運ばれたんだ）

慌てて身を起こしたものの、勇介はすぐさま全裸の状態に気づいた。

「……あ」

身体に付着していた汚液はきれいに拭き取られていたが、ペニスはいまだに勃起を維持し、太い芯の入った裏茎を見せてつけている。

股間を両手で隠すと、絵里子はクスツと笑った。

「若いのね。タオルでおチンチンを拭いてたら、また大きくなるんだもの」

「ひ、ひどいですよ。気を失つてるときに」

「だって、汚れを拭かなきゃ、しょうがないでしょ？ それとも、まだ出し足りないのかしら？」

熟女が意味深な笑みを浮かべれば、逸物がまたもやひりつく。射精した直後だというのに、自分でも驚くほどの性欲だ。

（いや、性欲だけが原因じゃない。相手が絵里子さんだからだ）

美しい容貌を盗み見すれば、胸が激しくときめく。

絵里子を抱きたい、童貞を優しく奪ってほしい。至極当然の欲求に駆られた瞬間、勇介はある事実に気づいた。

「ぼ、僕、どれくらい寝てました？」

「さあ、五分ほどじゃないかしら」

「ま、まじいんじゃないですか？」

「何が？」

「美貴や萌ちゃんが戻ってきたら、大変なことになると思います」

「ふふっ」

真剣な表情で訴えるも、絵里子はどこ吹く風といった顔を見せる。

「大丈夫よ。二人とも、ものすごい長湯なの。私が声をかけなければ、いつも一時間以上は平気で入ってるわ。あの子たちが本館に向かってから、まだ三十分も経ってないんだから」

「そ、そうですか……それなら、いいですけど」

ひとまず安堵するも、やはり気が気でない。

不安と童貞を捧げたいという本音が交錯し、勇介はただうろたえるばかりだった。

（ああ、やりたい、絵里子さんとエッチしたい！でも、この状況じゃ、いくら何で

も無茶だよな)

果たして、さらなる享楽に浸る時間はあるのだろうか。

絵里子の言葉を思い返せば、詫びのつもりで誘いをかけてきたらしい。いくら酔っているとはいえ、義理の息子と禁断の関係を結ぶとは思えなかった。

ところが熟女は目を細め、人差し指で勇介の胸をなぞりあげる。

「どうしたい？」

「へ？」

「おチンチン、まだ満足してないみたいだけど……」

「あ、うっ」

彼女はなおも首筋に唇を這わせ、指先で乳首をいらった。

海綿体に血液が集中し、ペニスが完全回復を見せる。絵里子の言うとおりに、猛々しい牡の性欲は一度きりの放出では満足できないらしい。

深奥部で燻っていた欲望の炎が燃えさかり、怒張が再び疼きはじめた。

「あ、そ、そんな……」

絵里子は顔を下方に移動させ、今度は舌先で乳頭を舐め転がす。快感の微電流が身を駆け抜け、勇介は思わず身をくねらせた。

「あ、くううつ」

清らかな唾液が塗りつけられ、小さなポッチがみるみる尖っていく。

男も乳首が感じることを、未熟な少年はこのとき初めて知った。

ふっくらした唇はさらに下り、臍の周りを優しく這ってはついばんだ。

「お、お、おっ」

彼女の顎の下で、ペニスがピンピンに反り返っている。

このあとは、いったいどんな展開が待ち受けているのだろう。

腰を跨がり、肉槍の穂先を女肉の狭間にあてがうのか。それとも……。

(も、もしかして……お口で?)

童貞少年にとって、フェラチオはセックスに匹敵する好奇心を与えていた。

ふだん食べ物を食する口が牡の排泄器官を招き入れ、男根を涎まみれにしながら舐

めまわす。悩ましげに歪む美貌が、男の征服願望を満たしてくれるのかもしれない。

フェラチオシーンの画像や動画を閲覧しては、精を何度ほとばしらせたことか。

柔らかい唇と口の中は、どんな感触を与えてくれるのだろう。

淫らかな光景が脳裏を駆け巡り、勇介は今か今かその瞬間を待ちわびた。

「すごいわ……勇介くんのおチンチン、カチカチになってるわよ」

絵里子が顔を上げ、濡れた瞳を輝かせる。そしてとなりのチェアからタイルに足を下ろし、勇介の両足のあいだに跪いた。

「もっと足を開いて」

「はあはあはあ……は、恥ずかしいです」

身悶えながら拒否するも、淫猥な要求に抗えない。

「あ、ああ」

熟女は勇介の足を強引に割り開き、さらに身を寄せつつ上体を屈めた。

（や、やっぱり、フェラチオだっ！）

あまりの昂奮から心臓がバクバクと音を立て、ペニスがひと際跳ね躍る。

唇のあわいから透明な粘液が滴り、亀頭冠をねっとりまぶしていくと、勇介は腰に熱感を走らせた。

絵里子は上目遣いに見つめ、肉幹に熱い息を吹きかける。焦らしのテクニクに、昂奮のボルテージはいやが上にも上昇の一途をたどった。

「あ、あ、あ……も、もう」

「ふふっ、かわいい。おチンチン、どうしてほしい？」

「ま、また……イキたいです」

口の中に溜まった唾を飲みこみ、本音を告げれば、熟女は悪戯っぽい笑みを浮かべる。そして根元に指を絡ませ、またもやたつぷりの唾液を宝冠部に滴らせた。

「どんなふうになりたいの？ また手でしごかれない？ それとも、別のやり方がいい？」

「は、はいっ」

上ずった口調で答え、丹田に力を込める。

猛烈なフェラチオシーンを妄想した刹那、絵里子はなぜか上体を伸ばし、豊満な乳房を肉幹に寄せてきた。

(えっ!!)

唾液まみれの剛直が、ふんわりした乳房の狭間に包まれる。美熟女は両脇から手を添え、屹立をしつかり挟みこんだ。

(パ、パイズリだああっ!)

目を丸くし、心の中で快哉をあげれば、絵里子は上半身を揺すりながら肉筒に快楽を吹きこんでいった。

「あ、くうっ」

しっとりした柔肌が上下左右からペニスを揉みこみ、心地いい快楽を与える。



スライドのたびに亀頭が胸の谷間から顔を出し、すべりが悪くなると、絵里子は唇を窄めて何度も唾液を滴らせた。

粘液がにちゅにちゅと淫靡な音を奏で、同時に射精願望が二度目の上昇気流に乗りはじめた。

「気持ちいい？」

「は、はいいつ……き、気持ちいいです」

熟女は微笑をたたえ、童貞少年の様子をじっと見つめていた。

色っぽい視線が性感をさらに昂らせ、腰と太腿の筋肉が痙攣を起こしはじめた。

勇介はチェアの背にもたれ、切なげな表情でパイズリプレイを見下ろした。

まさか、高校二年でアダルトビデオばりのプレイを体験しようとは夢にも思っていなかった。

しかも相手は思い焦がれていた初恋の人であり、義理の母でもあるのだ。

「勇介くんのおチンチン、熱いわ。おっぱいが火傷しそう」

ババロアさながら、生白い乳丘がぶるんと弾む。柔らかくも内から押し返す弾力が、少年を桃源郷へといざなう。

やがて絵里子は乳房を互い違いにスライドさせ、ペニスにきりもみ状の肉悦を吹き

こんでいった。

「あつ、くつ、おつ」

いびつになった乳丘が円を描くように揺すられ、怒張を根元から雁首までまんべなくこすりあげる。

両足を突つ張らせた勇介は、徐々に大口を開けていった。

「あ、あ、あ……」

放出したばかりにもかかわらず、若い牡のエキスは早くも射出口に集中する。

よくよく考えてみれば、いくら見かけが上品とはいえ、彼女はまごうことなき人妻だったのだ。性体験は豊富なはずで、亡き夫にも淫らな奉仕をしていたのだろう。

美熟女が見せる妖艶な表情、ふしだらな振る舞いに少年は陥落寸前だった。

「イクつ……またイツちやう」

泣き顔で腰を震わせたとたん、絵里子は抜群のタイミングでパイズリをストップさせる。

「んっ、くおおおっ」

勇介は上半身をブリッジ状に反らし、顔を真っ赤にして歯列を噛みしめた。

射精感がみるみる下降し、やるせない思いに身悶える。

「だめよ、まだイッチャ」

絵里子はまたもや悪戯っぽい笑みを向け、乳房からペニスを離れた。

苛烈な刺激を受けた肉棒は青竜刀のごとく反り返り、鈴口からは前触れの液が滾々と溢れこぼれている。

「はっ、はっ、はっ」

犬のような息継ぎを繰り返すなか、熟女は肉幹に指を巻きつかせ、プラムにも似た唇を窄めた。

「あ、ああ」

唾液の雫が糸を引き、またもや宝冠部をまぶしていく。

（も、もしかして……）

思い焦がれたフェラチオが頭に浮かび、大いなる期待に胸を震わせる。

「おチンチンの皮、お口で剥いてあげる」

「は、おおおっ」

淫語が脳幹をスパークさせ、勇介は意識的に全身を強ばらせた。

三分の一だけ包皮を被ったペニスに、絵里子が艶やかな唇を近づける。

微かに開いた口から熱い吐息が洩れ、敏感な先端にまわりつく。

熟女は舌を突きだし、陰囊から裏筋に向かってゆっくりなぞりあげた。

「は、はううううっ！」

「イッちゃだめよ」

絵里子は甘くねめつけ、根元を指先でキュツと締めつける。

青筋がぷっくり膨らみ、鬱血した怒張はまるで茹でたフランクフルトのようだ。

ピンピンにいななくペニスが頭を振り、亀頭がはち切れんばかりに張りつめる。

長い舌が雁首を這うたびに、勇介は苦悶の表情で歯を剥きだした。

疼く勃起を口に含んでほしい、滅茶苦茶にしゃぶりまわされたい。少年の心の内な

どお見通しなのか、熟女はなかなか本格的な口戯に移らなかった。

指先で根元をゆったり揉みこみ、妖艶な笑みをたたえながら胴体にソフトなキスを

繰り返す。

「ふふっ、勇介くん、ホントにかわいいわ。食べちゃいたいくらいよ」

「あ、ああっ、も、もう……」

切なげに身をくねらせれば、絵里子は瞳をきらめかせ、形のいい唇をゆっくり開け放った。

「おっ、おっ」

ぷちゅんと唾液の跳ねる音とともに、男根が口内に呑みこまれていく。

柔らかい唇、ぬつくりした口腔。ペニスが蕩けそうな感覚に驚嘆した勇介は、身体の動きを止めて下腹部を凝視した。

勃起がみるみる唾えこまれ、濡れた粘膜が怒張をしつぱり包みこむ。

(はっ、はっ……ディープスロートだあ)

絵里子は眉間に皺を刻み、牡の肉を根元まで招き入れては首を左右に打ち振った。

先端を喉元で締めつける感触がはつきり伝わり、感動にも似た情動が身体の内側から迫りあがる。

熟女が顔を引きあげると、口唇の端から小泡混じりの唾液が滴り、肉胴がぬらぬらと妖しく輝いた。

「あ、う、ふうう」

やがて舌先がうねり、亀頭の周囲を這いまわる。

絵里子は宝冠部を含んだまま、舌で包皮を剥いているらしい。あまりのくすぐったさに顔を歪めた瞬間、先端に違和感が走った。

ペニスが口から抜き取られるや、包皮がきれいに翻転し、ベビーピンクに染まった肉実が剥きだしになっていた。

「あつ、ううっ」

皮が雁首を締めつけているのだろう、痛痒い感覚に腰がひくついてしまう。

「勇介くんのおチンチン、ピクピクしてる」

絵里子がペニスをしごきたてると、射精願望はいよいよ切羽詰まった状況に追い詰められた。

濡れた唇が再び頭頂部に被せられ、肉筒がズズズと呑みこまれる。

熟女は剛直を半分まで咥え、まずは中ピッチのスピードで顔をスライドさせた。

頬が鋭角に窄み、真空状態と化した口内で勃起が引き絞られる。しかもピストンの合間に、舌先が縫い目をなぞりあげるのだからたまらない。

「あつ、んっ、くっ、ほおおっ」

勇介は啜り泣きに近い声をあげ、身体を女の子のようにくねらせた。

じゅぱっ、じゅぱっ、じゅるるるっ。

すぐさま派手な吸茎音が鳴り響き、次第に顔の打ち振りが勢いを増していく。

生温かい唾液に泳がされた男根が、熟女の口の中で跳ねまわる。

(こ、これがフェラチオ、すごい、すごすぎるよお！)

下半身が浮遊感に包まれ、白濁の溶岩流が睾丸の中で煮え滾った。



筋肉ばかりか骨まで溶解し、思考がどろどろに煮崩れした。

フェラチオで、これだけ気持ちいいのである。セックスは、どれほどの悦楽を与えてくれるのだろうか。

肉棒が限界まで膨張した瞬間、絵里子は右手をローリングさせ、さらには顔をS字に振ってスクリュー状の刺激を吹きこんだ。

「あっ、おとおおっ！」

ずちゅんずちゅん、ぎゅぽっ、ぢゅるふふううっ！

濁音混じりの猥音が鼓膜を揺らし、快楽の奔流に押し流される。

童貞少年が、とても堪えられる口戯ではない。捲れあがった唇がリズムカルなスライドを繰り返し、今やペニスの根元は大量の唾液でベトベトの状態だ。

脳の芯がじんじんと痺れ、欲望の塊が逆巻きながら突きあげる。

「あっ、もうだめっ、だめですうううっ！」

我慢の限界を訴えたものの、絵里子は髪を振り乱し、上下の唇で肉棒を貪るように舐めしやぶった。

このままでは口中に放出してしまうが、自制の結界は脆くも崩れ落ち、牡の本能に抗えない。



「あつ、イックつ！ イクううううつ!!」

腰をバウンドさせた刹那、絵里子はすかさずペニスを吐きだし、唾液まみれの肉棒を右手でしごきまくった。

「あ、お、お、おとおおおとおおつ！」

おちよぼ口に開いた尿道から、濃厚な樹液が一直線に跳ねあがる。ザーメンは二発三発四発と続けざまに射出し、二度目とは思えぬ量の放精を見せつけた。

「や……すごいわ」

絵里子は目をとろんとさせ、感嘆の溜め息を漏らして顔を寄せる。そしてさも愛おしげに、噴出を繰り返すペニスを唇や左右の頬にこすりつけた。

鼻筋や口元にとろみの強い淫汁がへばりつくも、今は熟女のはしたない行為を目にする余裕はない。

至高の射精にどっぷり浸った勇介は双眸を閉じ、ビデオのコマ送りのように上体を揺らめかせていた。

「は、はふううつ」

放出感が徐々に消え失せ、正常な思考が働きます。

頭を起こして下腹部に目をやると、絵里子はザーメンまみれのペニスを頬張り、お

掃除フエラに没頭していた。

「ふ、ン……勇介くんのおチンチン、おいしいわ」

ねっとりした舌が絡みつき、肉胴に付着した残滓が清められていく。熟女は口から抜き取ったペニスにキスを繰り返して、ぽてつとした唇を肉胴に何度もすべらせた。

熱い感動に打ち震え、愉悅の波がまたもや押し寄せる。

勇介は心地いい疲労感に包まれながら、恍惚の表情で背もたれに頭を沈めた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト  
「ノックタリッシュノベルズ」  
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の  
外伝作品もあり!  
電子書籍でしか読めない電子小説

フリーダム120%!?  
ジャンルにとらわれない  
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界の  
ドキドキ  
キアラノベル

ドキドキキアラノベルな  
ライトノベル系  
ドキドキキアラノベル!

二次元ドリーム文庫